

# 序

饅<sup>す</sup>えた臭いが鼻を突き、思わず手を止めた。人より鼻が利く分、この空気には辟<sup>へき</sup>易<sup>えき</sup>する。口をすぼめて浅く呼吸をする。消えはしないが、鼻で吸うよりはいくぶんマシだ。そもそも、己の体からも同じ臭いが漂っているのだから、防げるものではない。しばらくすれば鼻が馬鹿<sup>ばか</sup>になり、慣れる。それまでの辛抱だ。

薄汚れた人々<sup>ひとびと</sup>が、掘っ立て小屋の中に密集していた。何日も洗わぬ服と肌。狭苦しい寢床では、疲労が堆積していく。これほど多くの人間が集まれば、空気さえも腐り、悪臭を放つのだ。誰もがうつむき、肩を丸めていた。

そんな彼らの隙間を、音もなく縫うように歩く。肩が触れそうになると、

相手はぎょつと身を引いた。瞳に浮かぶのは怯えおびの色だ。仮面の隙間からその反応を眺め、心の内で首を傾げた。

（べつに、かみつくわけでもないのに）

だが、誰もが自分を避ける。

その理由は知っていた。直接そう言うてくる者は少ないが、漏れ聞こえる声から推測はできる。

——魔獣の子。

白い髪に、赤い瞳。魔獣の血を引く子供だ、と誰かが吐き捨てるように言っていた。

魔獣。弱い個体は瞳を怪しく光らせるだけだが、強大になるほど色を失い、やがて血のような赤に染まっていくという。それと同じように、己の色彩も徐々に損じょじょなわれていった。主人の言いつけで服で肌を隠してはいる

が、服の下を這う醜い痣は、この吹き溜まりの住人たちにとっては公然の秘密だった。

共同生活において、肌を隠し通すことなど不可能に近い。いつもは褐色の肌に紛れているとはいえ、日の下では浮かび上がってしまう。

小屋の端に座り込み、じっとその時を待つ。やがて入口付近が騒がしくなり、かすかな食べ物の匂いが漂ってきた。食事の時間だ。

躡けられた獣のように、配膳台の前に列が形成される。その最後尾に混ざった。

自分の前後に自然に隙間ができる。列が進み、ようやく自分の番が来た。器を受け取ろうと手を差し出すが、何も渡されない。スープにパンを放り込んだ粗末な食事が、ゴトンと無造作に台の上に置かれた。他の者には手渡しているというのに、どうやら自分は特別扱いらしい。ぱちぱちと瞬く。

ただ、瞳が乾いただけだった。

「……………」

無言で器を拾い上げ、元の場所へと戻る。

スープを吸ってぶよぶよになったパンにかじりついた。ザラザラとした不快な舌触りで、味などほとんどしない。噛<sup>か</sup>みしめるほどに、味のしない塊が口の内にべったりと張り付く。それを舌でこそぎ落しながら、ただ機械的に嚥<sup>えん</sup>下<sup>か</sup>を繰り返した。

不意に、物音がした。

少し離れた場所で、ひとりの男が倒れていた。顔色は土色を通り越して白く、胸元では骨が皮を突き破らんばかりだった。手にしていたスープは半分以上が地面に吸い込まれ、パンがころころとこちらへ転がってきた。別の男が無言で、倒れた男の頭を小突く。ピクリとも動かない。その男は

口元に手を当て、小さく首を振ると、無表情のまま器を取り上げた。残ったスープを啜り、きよろきよろと視線を動かして転がったパンを探す。

「……チツ」

パンの前に誰が立っているかを知ると、その男は忌々しげに舌打ちをして去っていった。その後ろ姿を冷めた目で見送ってから、足元に止まったパンを拾い上げる。土を軽く払い、口に放り込んだ。じやり、と落としきれなかった砂の感触があったが、大した問題ではない。

スープでパンをふやかしながら、動かなくなった新入りを眺める。一月前に入ってきたばかりの男だ。かつては苦労など知らぬような、柔らかな手をしていた。それが今では黒く汚れ、肉刺が潰れたのか、包帯代わりに巻いた布に血が滲んでいた。

思ったよりも長く保った方だ。ああいった者は、早ければ数日で使い物

にならなくなる。

一週間は必死に泣き喚き<sup>わめ</sup>、次の週にはここを地獄だと怨嗟<sup>えんさ</sup>の声を上げる。そしてその次の週には、もう何も言わなくなっていた。そうして、今日、倒れた。

見慣れた光景だ。誰も動揺せず、倒れた男を邪魔だとも言いたげに一瞥<sup>いちべつ</sup>して通り過ぎていく。

いつか自分も、こうなるのだろう。それに対して、何も思うことはない。最後の一欠片を口に放り込み、立ち上がった。器を返却せねばならない。畏怖の視線が刺さる。勝手に人波が割れていくのは、歩きやすくて都合が良かった。

彼はここを地獄だと言った。けれど、自分はこれしか知らない。これが、日常だった。

# 買い出しとエドウィンとの夜

教国を離れてから、しばらく経った。今は国境近くの小国に身を寄せ、旅路の蓄えを積み上げている。

《蜜薬》<sup>ネクトル</sup>の販売はもとより、ルークの魔法具もかなりの高値で取引された。レオンとイザークは、街の冒険者ギルドで手近な討伐依頼を黙々<sup>もくもく</sup>とこなしている。大国に比べれば買い取り額は渋く、市場に品が溢<sup>あふ</sup>れれば値も下がるが、そこはギルドの伝手で紹介された商人がうまく差配してくれた。目標の金額まではあと僅か。神ノ島へ旅立つ日はそう遠くない。

五人という所帯になれば、宿よりも一軒家を借りるほうが都合が良かった。かつてのようにギルドに頼るのではなく、自分たちで交渉し、一月分を前納して拠点を確保した。流れ者の商人が中継地として利用することの

多いこの国では、余計な詮索もなく話はスムーズに通った。

借り受けた家は、五人の個室のほかに広々とした台所や風呂、倉庫まで備わっている。手入れの行き届いた掘り出し物件を、妥当な家賃で借りられたのは幸運だった。

そろそろ目的地——神ノ島へ向かう準備を本格的に始めなければならない。

買い出しに出たのは、ジン、イザーク、ルークの三人だ。特に他意はなく、その時手が空いていたのが彼らだったというだけだ。イザークはここまで貴族の連中が現れることはないだろうと堂々と顔と顔を晒し、対照的にルークは目深にフードを被り、周囲を警戒するようにジンの背に隠れている。国そのものは小さいが、大通りは軒を連ねる商店と人々の活気に溢れていた。

「やあ、兄さんたち。今日はなにをお求めかな?」

声をかけてきたのは、顔馴染みの店主だ。刈り上げた髭面に突き出た腹、一見すれば強面だが、笑うと愛嬌の滲む初老の男だ。

イザークが人好きのする笑みを浮かべ、ずいとな前に出る。共同生活の中で知ったことだが、彼は口が回り、相手を乗せるのがうまかった。無骨で口下手なレオンとは対照をなしている。

「近々、長い旅に出ようと思ってな。その準備に來たんだ」

「ほう、ついにか。神ノ島へ行くんだらう?」

「おう、それだ」

イザークが世間話に花を咲かせている間に、ジンは必要な物資を吟味していく。荷の嵩を気にする必要はない。彼らの手元にはルーク製の魔法袋がある。

魔法袋は、中身の重さこそ変わらぬものの、外見を裏切る量が入る。作成に高度な術式と希少な素材が必要らしいが、ルークがジンたちのために、その能力を発揮して市販品を凌駕する高性能な袋を人数分<sup>あつち</sup>詠<sup>りよう</sup>えてくれた。素材については技術と裏技を使ってどうにかしたらしい。説明してもらったのだが、ジンにはよく分からなかった。

品定めが終わる頃、イザークが鮮やかな手際で交渉を締めくくりにかかる。言葉巧みに、それでいて相手を不快にさせぬ塩梅で値切っていく様子を見ていてとても頼もしかった。

「まいったな、兄さんは本当に口がうまいなあ」

店主は困り顔を作りながらも、口元には満足げな笑みを湛<sup>た</sup>えていた。提示された金額を見て、ジンは内心で舌を巻く。相当安くなっている。

「そうだ。今日が最後になるかもしれないだろう？ これは餞別<sup>せんべつ</sup>だ。持

っ  
ていきな」

店主が奥から持ち出してきたのは干し果物だった。仕入れたが量が少なく、売るにも困っていたという。

「はい、これは、べっぴんさんに」

店主はルークにウィンクを投げた。一度、風にフードを捲めくられた際に見られたのだ。店主は彼をただの人見知りだと思い込んでいた。

ウィンクは意外と似合っていたが、ルークの口端が引き攣つるのがジンの位置から見えた。それでも、ルークはおずおずと袋を受け取り「……ありがとう」と掠かすれた声で礼を言う。店主は満足げに頷うなずくと、今度はジンの前に別の袋を置いた。

「で、こっちは色男さんに」

「……俺に？」

「おう！」

中にはルークのととは別の果実が詰まっていた。礼を言い、懷に収めようとする、店主が手招きをして耳元を寄せてくる。

「街を出ちまうなら、最後にどうだい、一晚？ 俺と……」

言いかけた言葉を最後まで聞く前に、ぐい、と袖を引かれた。ルークだ。次いで、イザークの腕がジンの肩に回される。

「おうおうなんだ？ 内緒話か？」

ルークの眼差しは冷たく、イザークの笑みには妙な庄がある。店主はそれを面白がるように、ははは、と豪快に笑い飛ばした。図太い男だ。ジンは思わず半笑いになった。

この国に来てから、店主のような誘いを受けることは一度や二度ではなかった。ジンだけでなく、レオンたちも同様だ。国民性なのか、あるいは

自分たちがそれほど目を惹くのか。いずれにせよ、すべて断ってきたのだ。  
が。

ルークの手が、ジンの手をぎゅっと握りしめる。力は大したことはない  
ので痛くはないが、苦笑を浮かべる。イザークは「俺には何もないのか？」  
と店主に絡み、「兄さんには、さっき割引をしたらどう？」と笑い飛ばされ  
ていた。

青い空を、千切れた雲がゆっくりと流れていく。

降り注ぐ陽光の眩しさに、ジンは目を細めた。

春が通り過ぎ、夏の足音が聞こえ始めていた。



夜の帳が降りてしばらくした頃、ジンの部屋の扉が密やかに叩<sup>たた</sup>かれた。

「……どうぞ」

声をかけると、長い髪を揺らした男が滑り込むように入ってくる。エドウィンだ。

「こんばんは、ジン」

どこか緊張した微笑み。ジンはその手を取り、柔らかくベッドへと促した。

この家を借りてから、夜ごとに誰かがジンの部屋を訪れるのが常となった。レオンから始まり、エドウィン、ルーク、そしてなぜかイザークまでもが顔を出す。

イザークを除き、他の者には大なり小なり好意を伝えられ、ジンはそれを受け入れていた。

始めは落ち着かなかったが、彼ら自身は平然としているので、いつしかそれほど気にならなくなったのだ。

彼らには、出会った順に夜を共にするという不文律があるようだった。

レオンとはすでに肌を重ねている。だが、次の番であるエドウィンとは、いまだ最後の一線を越えられずにいた。

互いに想いがあることは分かっている。触れ合いたいという願望も偽りではない。けれど、いざ進もうとすれば、エドウィンは怯えて震え出すのだ。

ジンは無理強いするつもりはない。だが、エドウィン自身はそれを不甲斐ないふがいと思うているのか、何度も済まなそうに眉を下げて謝罪を繰り返した。ジンにしてみれば、ただ側にいてくれるだけで十分なのだが、彼はそれでは嫌だと言い張る。

順番を待つルークは、エドウィンのペースで構わないと言っていた。、彼自身もこうした行為には不慣れで、その歩みは慎重だ。ちなみに最後尾のイザークとは、そうした仲になった覚えはないのだが、なぜか当たり前のように添い寝をする関係に落ち着いている。彼いわく「側にいると身体の芯が温まる」のだうだ。別に拒むほどのことではないので、そのまま流されている。

話を戻そう。

今夜はエドウィンの日だ。微かな灯火が壁に揺れる中、他愛ない言葉を交わしていた彼の唇が、不意にジンのそれに触れた。

控えめなそれを、今度はジンから奪う。

「ふ、っ……あ……」

縫<sup>すが</sup>るように肩を抱く姿が、かわいらしい。一回りも年上の男に対し、こ

の表現は不遜かもしれないが。こうなるたび「私は随分と歳上だが、大丈夫か」と不安そうに聞かれるが、むしろこちらが「年下だが大丈夫か」と聞きたいくらいだった。

キスを交わしながら服を脱がせ、自分のものもさっさと脱いだ。肌が触れ合うと、エドウィンの体温がじわりと伝わってくる。緊張のせいかな、心臓の鼓動が速かった。

「はっ、あ……ん」

《蜜薬》<sup>ネクトル</sup> 作りの時と同様に、口内へ深く舌を滑らせて唾液を注ぎ込めば、エドウィンの喉がごとりと鳴る。とろりと蕩けた瞳が潤み、視線が彷徨う。《華弁持ち》<sup>ラヴァアル</sup>の体液は、《欠けたもの》<sup>レ</sup>にとって媚薬<sup>びやく</sup>のようなものだという。体に悪くないのかと聞いたが、残るものではないらしい。エドウィン曰く<sup>いわ</sup>、とびきり美味しい食事のようなもの。無くても構わないが、あれば口にし

たいと願うもの、らしい。

舌を吸うと、ビクビクと背中が跳ねた。眼帯に覆われていない方の眦まなじりに涙が溜たまる。零れそうな涙を指先で拭い、髪をかき混ぜるように撫なでると、エドウィンはうつとりと目を閉じた。

深いキスをしたまま、手を鎖骨、胸、腰へと徐々じょじょに下ろしていく。腰の出っ張りをカリカリとひつかくと、エドウィンはもどかしげに身を振り、熱い吐息を漏らした。

屹きつりつ立する中心にはあえて触れず、内腿うちももを擦くすぐると、涙をたたえた目で睨にらまれる。

「も、さわって……ください……っ」

普段の泰然自若とした姿はどこへやら、切羽詰まった声が震えている。上気した肌は艶やかに光り、吐息は熱を孕はらんでいた。

「はあっ、ん、あっ……！」

十分に焦らしてから、熱を持ち、震える中心へ手を伸ばす。溢れ出した先走りです。そこは酷く濡れ、掌にぬめりと熱い粘度がまとわりついた。上下にしごきあげれば、エドウィンは喉を反らし、途切れ途切れの鳴き声を上げる。左右に振られる長い髪が、柔らかな鞭むちのようにジンの肌を撫でた。

「あ、っ」

昂たかぶりを宥なだめながら、もう片方の手を、固く閉ざされた蕾つぼみへと導く。ぴくりと、彼の肩が大きく揺れた。

以前は、触れるだけで顔色を失った。だが今夜は、戸惑いながらも拒絶の色はなかった。潤滑剤を手のひらで温め、蕾の入り口へと丹念に塗り込んでいく。内壁の熱い締めりを確かめながら、指をゆっくりと押し入れていった。片手で中心を可愛がり、萎えないようにしながら――。が、

「っ……!」

指の第一関節が沈んだ瞬間、エドウィンの腰が跳ねるように逃げた。快樂ではない、それは、怯えたかった。顔を強張らせ、その瞳が激しく揺れ動く。

「あ、っ……」

そっと手を引き、身を遠ざけようとすると、我に返った彼の手がジンの腕を強く掴んだ。

「ご、ごめんなさい……」

眉を悲しげに寄せ、震える瞳でジンを仰ぎ見る。嫌われていないだろうか、許してくれるだろうか——目は口ほどに訴えかけていた。ジンは彼を安心させるように、頬に唇を寄せ、そのまま抱きしめた。

互いの体温が混ざり合うにつれ、強張っていた彼の身体から次第に力が

抜けていく。控えめに抱き返してくる彼を、ジンはそれ以上の力で受け止めた。

形は違えど、このやりとりを、もう何度も繰り返している。良いところまで進むのに、最後の一步が踏み出せない。拒絶反応のようなものを起こす。エドウィン自身は原因を自覚しているようだが、語ろうとはしない。

……怒ってはいない。ジンが考える以上に、《欠<sup>リ</sup>けたもの》<sup>レ</sup>は想像もできないような人生を歩んできている。エドウィンは《欠けたもの》だ。話せない過去があるのも、当然のことだろう。

「ジン……？」

腕の中で、エドウィンがおおずとおおずと名を呼んだ。

「あの、すみませんでした。何度も……。その……」

ジンは首を横に振った。無理強いはしたくない。揺れる瞳に苦笑を返し、

やっと血の気が戻ってきた頬を撫でる。エドウィンはその手を取り、縋るように指を絡めた。

「……もう少しだけ、待ってください。必ず、話しますから」

「別に、無理はしなくていいぞ」

「いえ、私が……したいのです」

見上げた瞳には、強い意志が宿っていた。気圧されるようにジンが頷くと、彼はようやく安堵したように微笑んだ。

今夜はこのまま眠りにつこうと身体を横たえかけたが、腕の中の彼がもごもごと口を動かした。ちらりと、ジンの股の間へ視線を落とす。そこには、鎮まらぬままの屹立があった。

「……このままで大丈夫ですか？」

「いや、放っておけばそのうち……」

元に戻る、と答えようとした口がエドウィンに塞がれた。

おずおずと差し込まれた舌が、ジンの口内を弱々しく舐め上げた。エドウィンは羞恥と覚悟の混じった顔で、自身のものとジンのものを一本の手で纏めて握り、しごき始める。拙い動きだが、清廉な彼がそれをしていると思うと下腹のあたりが重くなった。

ふうふうと頬を赤らながらジンのために動く彼をしばらく眺めていたが、耐えきれずにジンも手を伸ばした。

「っ！」

エドウィンの口内へ深く舌を入れ、反応を見ながら良さそうなところを刺激する。同時に彼の手の上から自分の手を重ね、激しく上下させた。先走りのぬめりと、肌の熱が掌にまとわりつく。目を白黒させながら、エドウィンは悶えるように身体をくねらせた。

「ふっ、あ、あっ……あっ！」

唇を離すと、銀の糸が引き、彼の口端が淫らに光った。熱い吐息と共に、耐えきれぬ喘ぎ声あえぎこえが漏れ出す。

ぐちゃぐちゃと互いの先走りが混じり、水音を立てる。手がジンのものか、エドウィンのものか分からなくなる。頭の芯が熱を持ち、腰の奥がじりじりと疼くうず。

「あっ、あ、ああッ——！」

「く、っ……」

絶頂はすぐそこだった。まずエドウィンが短い悲鳴を上げて身体を仰けのぞらせ、次いでジンも吐き出すように果てた。

荒い呼吸の中、視線が交差する。ジンが労わるように額へキスを贈ると、エドウィンは驚いたように目を見開いたが、すぐに愛おしげに笑い、お返

しとばかりに唇を吸い寄せてきた。ちゅう、と遠慮がちに吸われる唇を  
甘噛<sup>あまが</sup>みで留め、舌を伸ばした。

しばらくの間、部屋にはふたりの甘く乱れる吐息が響いていた。

# 船の上

「不味い……」

ルークがうんざりと呟いた。その言葉に、ジンも無言で同意する。

目の前にあるのは、塩漬け肉と申し訳程度の野菜を無造作に放り込み、形を失うまで煮え立たせた粥状の塊。それと、石のように硬いビスケットだ。美味いとはお世辞にも言えない。ビスケットを噛み砕くたび、口内の水分が無慈悲に奪われていった。

航海が始まった数日間、まだ旅の昂揚感が不味さを補ってくれていた。だが、単調な日々が二週間も続けば、食事の時間はさながら軽い拷問へと変わった。当初は口を開けば不平を漏らしていたルークも、不満を述べたところでメニューが変わらないという現実をついに受け入れ、修行僧のよ

うに黙々もくもくとスプーンを動かしていた。けれど、その忍耐も限界を迎え、一周回って、また口に出さずにはいられなくなったらしい。ジンにも、彼の口を再び閉じさせる気力は残っていなかった。

レオンたちも同様だ。疲労を隠しきれぬ面持ちで、義務的に食事を嚥下えんかしている。

不意に船体が大きく揺れ、卓上で萎びかけていた林檎りんごが転がった。

「……」

ジンは無言でそれを捕まえ、膝の上に乗せて落ち着かせる。

溜め息を吐きながら顔を上げると、窓の外には西日に染まり、黄金の輝きを放つ水平線が広がっていた。この美しくも単調な水溜りみずたまりが、日が落ちた後の黒々とした闇へと姿を変えるまでには、まだしばらく時間がかかるだろう。

ジンたちは今、船の上にいた。

目標の金額をようやく貯め、神ノ島へ向かう船に乗り込んだのだ。年に三度しか往来しないという貴重な定期便に、運良く滑り込むことができた。船は想像していたよりも堅牢な造りだった。豪華客船のような華やかさこそないが、長期の航海に耐えうる質実剛健な信頼感がある。

一行は、等級によって区画分けされた客室のうち、二等室を二部屋借り受けていた。

三等室は雑魚寝に近い環境だが、二等室にはベッドと小さな筆記机が備えられている。本来は一人から二人用の手狭な空間だ。三部屋を借りるだけの余裕はなく、諸事情によってジンは二等室に振り分けられた。体格の良いレオンと同室になるときなどは、ベッドはさらに狭く感じられた。

一等室は関係者以外立ち入り禁止になっていたため、その内側を伺い知

ることはできない。噂うわさによれば王侯貴族の滞在にも耐えうる豪華な内装だという。今回の旅でも数名の貴人が利用しているらしいが、二等以下の乗客にとつては別世界の話に等しい。今のジンに分かるのは、憧れた船旅は期待ほど優雅ではなく、むしろ過酷だという現実だけだった。

萎びた林檎に歯を立てる。もそもそと、乾いた繊維が舌に触れる。それでも、今の食事における唯一の慰めだった。事実、あの粥もどきに比べれば何倍も美味しかった。

「なあ、もうないのか？」

「……ない」

レオンが懷から魔法袋を取り出し、虚しく逆さに振って見せた。ルークが手がけた魔法袋は外見以上の容量を誇るが、乗船時に詰め込んだ食料の備蓄は、すでに全員の胃袋の中へと消えていた。

地元住民の助言に従って保存食を買い込んでいたが、航海の日数に対する見通しが甘すぎた。袋の底が見えなくなるほど詰め込んでくるべきだった。

二等室の乗客には一日三食、食事が提供される。しかし、出てくるのは例外なく、あの味気ない粥もどきだ。それが延々えんえんと繰り返される。

乗船前のジンたちは、旅の娯楽として砂糖菓子や蜂蜜漬けを優先して袋に詰めていた。長い閉鎖環境には心の潤いが必要だと考えたのだ。

だが、あの瞬間に戻るなら、迷わず襟首つかを掴んで忠告するだろう。「娯楽よりも日常を重んじろ」と。砂糖菓子の代わりに日持ちする野菜を、そして噛みしめるほどに味の出る干し肉をかうべきだった。餞別せんべつの干し果

実も悪くはないが、いかなせん主食の代わりにはなり得ない。もっと、持ち込めばよかった。ルークという魔法具の天才がいるのだ。

彼なら魔力による冷却装置だって用意できたはずだ。事前に予見できていれば、魔法具の容量の限界まで食料を詰め込み、それどころか自らの肩に大きな袋を担いで運び込んでいただろう。

まあ、今更なに言っても遅い。

ジンはちびちびと、皿の底に残った欠片を惜しむように食べ進める。せめて、食材が食材としての形を留めていてくれたなら。そうすれば、食事という時間をわずかにでも楽しめたかもしれない。

いつだったか、給仕が運んでいくのを一度だけ目にしたが、一等室向けの料理は陸上の豊かさには及ばぬものの十二分に食欲をそそる芳香を放っていた。

あれが二等にも供されればと願うが、一等と二等では運賃の桁がひとつやふたつではきかない。とても支払える額ではなかった。

それに、一等の客層はいずれも高貴な身なりをしており、隠し事を抱えるジンたちには不向きだ。あのような場所では、自分たちの存在はあまりにも目立ちすぎる。

ゆっくりと時間をかけても、最後にはスプーンが乾いた皿の底を叩く。最後の一口を飲み込み、重い息を吐き出した。

腹は満たされたが、心は沈んでいく。差し引きマイナスの結果にげんなりしながら、木製のコップを手を取った。中にある水は、海水を真水へと変える魔法具の副作用か、独特の匂いが鼻を突く。それでも、喉を潤せるのはこれしかなかった。

給仕が空になった皿を回収していくのを見守りながら、ジンはこれから足を踏み入れる土地に思いを馳<sup>は</sup>せた。

断片的な情報は、すでにエドウィンやルークから聞いていた。レオンや

イザークは知らなかったようで、誰もが共有している一般常識というわけではないらしい。

悠久の昔、神々<sup>かみがみ</sup>が鎮座していたという島——神ノ島、ヘスティア。

神々はすでに地上を去り、今や島には彼らが遺したとされる壮麗な建造物や、未知の遺構が沈黙を守っている。それらは『聖遺物』と呼ばれ、現代の魔法技術では到底説明不可能な超高度な術が秘められているという。学術的な価値は計り知れず、多くの賢者たちがその構造を読み解こうと心血を注いでいる。現代の魔法体系も、この地の遺物を土台として発展してきたのだ。

当然、聖遺物は市場で莫大<sup>ばくだい</sup>な富を生む。ゆえに、真理を求める学者だけでなく、一攫<sup>いっかく</sup>千金の夢に憑<sup>つ</sup>かれた者たちも日々発掘に勤しんでいる。だが、彼らは知識もなく無謀に奥へと踏み込み、その多くが古の罫<sup>わな</sup>や遺跡に宿る

魔法の餌食となって命を落とす。

ヘスティアは現在、「穏やかな無法地帯」と称されている。一見すれば矛盾したその言葉だが、この島の現状を最も的確に表している、らしい。

莫大な遺物を産出する富の源泉。どこの国も自国の領土だと主張したが、それが叶<sup>かな</sup>わぬ夢だった。もし一国が本気で支配を望めば、世界を巻き込む血で血を洗う戦争へと発展することは火を見るより明らかだったからだ。

結果として、ヘスティアは長い歴史の中で、どの国家にも属さない中立の地として暗黙の了解が成立した。互いに牽制<sup>けんせい</sup>し合い、足を引きずること、どの国も単独での調査を完遂できない。結果、法が届かぬ無法の地となった。

なぜこれほど詳しいのかと問うジンに、ルークはある程度の地位に就け

ば、嫌でも耳に入る不快な噂うわさのひとつだ、と苦々にくにくしく答えた。国家が表立って介入できない代わりに、彼らは秘密裏に動いている。借金で首の回らなくなった債務者や、身寄りのない流れ者を労働力として送り込んでいるとか。そうした者たちは、神ノ島で人間としての尊厳を剥奪され、ひどい扱いを受けるらしい。

彼らは債務奴隷セベルと呼ばれ、その扱いは人をも人と思わぬ過酷なものだという。語るルークは、重苦しい溜め息ためいきを吐いた。

エドウィンもまた、異なる経路から情報を得ていたようだが、心当たりがあるのか厳しい表情で沈黙を守っていた。

——奴隷。

まったく、想像もしていなかった言葉だ。神ノ島へ向かうと決めた時、ルークが一瞬だけ厭いとわしげな表情を浮かべた理由を、ジンはようやく理解

した。

オークションに掛けられたイザークでさえ「奴隷」という言葉は使われなかった。だが、これから向かう土地には、そう呼ばれ、使い潰される人々がいる。想像するだけで、胸の奥がざわめいた。

そもそも、ジンは《欠けたもの》と《華弁持ち》、そして普通の人間の間  
に引かれた線を、決して善いものだとは思っていない。

《欠けたもの》も《華弁持ち》も、同じ血の通った人間ではないか。なぜ  
不自然な線を引く必要があるのか。誰かが上で、誰かが下。そのような思  
想は、醜い差別以外の何物でもないと感じていた。

だが同時に、そう区別したがる人々の心理も察してはいた。

人は、己の理解を超えた異質な存在を恐れる。特異な力を持つ《欠けた  
もの》が畏怖の対象となるのは、それゆえだろう。そして、その猛獣の

手綱<sup>たづな</sup>を握る《華弁持ち》を過度に神聖視する理由<sup>わけ</sup>も——決して許されるべきではないが、感情としては理解はできる。

しかし、ヘスティアで「奴隷」と呼ばれる者たちの多くは、特別な力を持つ《欠けたもの》ですらない。ただの人間だ。だが、虐げられる姿はどうか似ていた。

ジンはこれまでの旅を通じ、社会には厳然たる階層があることを学んだ。王、貴族、そして平民。それとは別の特異点として、《華弁持ち》と《欠けたもの》が存在する。おそらく神ノ島では、その『特異点』が奴隷なのだろう。

自らのコミュニティの外に仮想敵を作り、批判や憎悪を一点に集める。共通の敵なしにはまともな人々が、その歪<sup>いびつ</sup>な結束で一体感を得る。支配者にとって、これほど扱いやすい構図はない。古来より繰り返されてきた

手口でもある。

だが、ジンがいくら憤ったところで、世界が変わるわけではない。今の自分には、何も変える力などないのだ。

そもそも、自分自身の記憶さえ曖昧なままだ。今こうして立っていられるのは、レオンやエドウィンたちの助けがあったからに他ならない。ジン独りでは、記憶を探す旅に出るどころか、城の中で飼い殺しにされて一生を終えていたかもしれない。この世界に独りで立つには、自分を知らなすぎた。彼らへの感謝は、いくら言葉を尽くしても足りるものではない。

最後の一口となった水をあおる。ぬるく不味い液体が喉を通り、胃へと落ちていく。周囲を見渡せば、レオンたちも食事を終えたようだった。互いに短い言葉を交わし、それぞれの時間を過ごすために別れた。

部屋へ戻るジンの後を、ルークが静かに追ってくる。今夜は彼と同室の日だ。船旅の間、ジンの同室者は日替わりで交代していた。

レオンとイザークは、日が沈むまで甲板で体を動かし、鍛錬に励むのが日課だ。エドウィンは自室に持ち込んだ精密な器具を使い、研究に没頭しているらしい。ジンとルークは、室内で魔力操作の訓練に充てることにしていた。

初めて海を目にした時の、あの弾むような昂<sup>たかぶ</sup>りは、すでに遠い過去のよう  
うに思える。太陽が海面に反射し、無数の宝石を撒<sup>ま</sup>いたようにきらめく景色に、同じく瞳を輝かせていたのは最初の数日だけだった。どんなに美しいものであっても、ただ美しいというだけではいつしか飽きる。少なくとも、ジンにとっては。

手持ち無沙汰を埋めるために読み始めた本も、すでに二度目を通した。やる事が枯渇したジンは、夜ごとに部屋を訪れる「教師」たちから、色々な教えを乞うていた。レオンからは剣筋の基礎を、エドウィンからは魔導研究の初歩を、イザークからは弓術や罠わなの仕掛け方を。常に側にいてもらう必要はないが、指針と課題さえあれば、退屈を紛らわすことはできる。

そして現在、ルークからは、より繊細で緻密な魔力操作の手ほどきを受けていた。

ジンが用いている肉体操作は、周囲を照らすために特大の火炎魔法をぶつけるようなものだ、とルークは言った。余計な浪費が多すぎる。もっと効率良く使えるはずだ、と。

部屋に戻り、訓練を開始する。手のひら大の薄い紙を、魔法で作った微

かな風で宙に浮かせる。吹き飛ばすことなく、かといって落ちない程度の微弱な風を手のひらから発生させる。ルールが無造作に紙を一枚追加した。それも同様に、宙に維持する。安定していることを確認すると、さらに一枚、また一枚。最終的に、五枚の紙が一定の間隔を保ったまま、ジンの周囲を漂った。

三十秒間。ブレることも落ちることもなく、紙を浮かせ続ける。

「……できたみたいだな」

「ああ」

紙一枚を浮かせることなら、以前メルクアトルで彼に教わった際にもできていた。だが、二枚、三枚と数が増えるにつれ、その難易度は飛躍的に上がった。

「次は、それを回してみてくれ」

「回す？」

「こうやるんだ」

ルークが人差し指を一本、ぴんと立てた。その先端で紙がふわりと浮かぶ。次々と紙を追加し、ジンと同じ五枚を宙に躍らせると、それらは円を描くように滑らかな旋回を始めた。

「こんなこともできる」

水平に流れていた紙が、円を描きながら一枚一枚、独立した意思を持つかのようにくるくると回りだした。ルークが指を動かすと、一枚を残して他の紙が音もなく地面へ落ちた。残った一枚が、不可視の指先に操られるようにして、空中で折り畳まれていく。最後に完成したのは――。

「鳥？」

「ああ」

ルークが人差し指をつい、と前方へ向けると、折り紙の鳥は命を吹き込まれたように部屋の中を飛んだ。

「……すごいな」

「当然だ。これでも国の五指に入る技術者だからな」

当たり前だと澄ました顔をしているが、よく見ればルークの唇の端が上がっている。

「……俺にできる気がしないんだが」

「すぐに習得できなくて当然だ。だが、お前は筋が良い。たぶん、それほど時間をかけずに形にはなると思う」

「『それほど時間をかけずに』って、具体的にはどれくらいだ？」

「一年か、二年か、それくらいか？」

「……ずいぶん遠いな」

「一生を費やしても辿り着けない者が大半なんだ。それを思えば、とてつもなく短い。まあ、今は鳥までは作れなくとも、紙を複数枚を制御する感覚は掴んでおいた方がいい。……今のジンの魔法は、魔力量にものを言わせた、ただの脳筋だ」

ばっさりと切り捨てられ、ジンはがっくりと項垂れた。この坊っちゃん  
は合間合間に口が悪い。だが、正論でもあるだけに、反論もしにくい。

静止させるより、動かす方が遥かに繊細な制御を要する。浮かせた五枚を  
一気に旋回させようと試みたが、力の加減を誤り、紙は四方八方へと無  
様に散らばった。風の余波を受けて眉をひそめたルークに謝りながら、ジ  
ンは床に散った紙を一枚ずつ拾い集めた。

まだまだ修行が必要そうだった。